

## インターネットで世界とつながる。

「これは何だと思えますか？日本でも使われているモノです」  
大阪府立佐野高等学校の教室。パソコン画面の向こう側にいるのは、ラオスの高校生たちだ。インターネットを通じて二つの高校をつないだ通信授業のテーマは、自分の国にしかないモノ。日本からは、耳かき、冷却シート、かつおぶしなどを、ラオスからは、主食のもち米を入れる竹かご、魚を捕る仕掛け、仏教儀式で使う器などを見せながら、互いに英語で説明し合う。

「ラオスには竹でできているモノが多いんだね」  
「どんな時に使ったんだろう？」  
モノをきっかけに芽生えるさまざまな疑問。実際に顔を見ながら意見を交換することで、生徒たちの関心はさらに広がっていく。「たとえ離れていても、リアルタイムでコミュニケーションを取ることで、同じ時を生きているんだと実感してほしい」。そう話すのは、この授業を企画した安里佳世子先生だ。

国際教育を一つの柱とし、1991年に国際教養科を設立した佐野高校。英語教育に力を入れており、2年生からは中国語やフランス語などの第二外国語を選択、世界と日本のかかわりや地球規模の課題について学ぶ「国際理解」が必修科目になっている。また、青年海外協力隊の経験者やJICA職員による出前講座、JICA研修員との交流なども取り



途上国のJICA研修員との交流。直接話を聞くことで、途上国をより身近に感じることができるという

定です」と安里先生。ラオスの生徒たちも日本の高校生と話せたことで、日本をより身近に感じるようになり、次回を楽しみにしているという。2回目のテーマは、未来に残したいお互いの国の文化。生徒たちは張り切って準備を進めている。

## 自分で考える行動力を身に付ける

「国際理解」の授業に生かされているのが、JICA教師海外研修に参加した安里先生の経験だ。2007年にマレーシアのボルネオ島を訪れた安里先生が目にしたのは、森の恵みと共に生きる人々、そしてプランテーションとして開発さ

マレーシアでの熱帯雨林の開発について議論するロールプレイ。異なる立場から問題を考えることで視野が広がる



## 世界とつながる教室

入れている。  
今回のラオスとの交流は、佐野高校の卒業生で大阪府の国際協力推進員を務める上野貴子さんが懸け橋となり、ラオスで青年海外協力隊員として活動中の理数科教師、三原慶彦さんとの連携が進められている。「1回きりの交流ではなく、これからもテーマを変えて続けていく予

れ、破壊が進む熱帯雨林だった。「私たち日本人もプランテーション開発の恩恵を受けています。それなのに環境保全なんて語る資格があるのか。そんな矛盾も素直に生徒たちにつづけて、一緒に考えています」  
そこで安里先生が実践しているのが、環境問題を考えるロールプレイだ。「熱帯雨林をプランテーションにするべきか」をテーマに、マレーシア政府、住民、開発企業、環境NGO、消費者などそれぞれの立場に分かれて意見を出し合う。「英語で議論するのはですが、たとえ文法が正しくなくても、生徒たちの、伝えたい」という思いがこもった生き生きとした授業になっています」と安里先生は話す。

こうした取り組みを通じて、生徒たちが行動力を身に付けてきた。3年生の黒瀬智加さんは2012年9月の文化祭でユネスコ部のメンバーとチャイ(ミルクティー)を販売。途上国の教育支援を行うNGOに売り上げを寄付した。「国際協力」と一言で言うのは簡単ですが、一歩を踏み出す大変さを学びました。それでも、小さなことから行動し続けていきたい」と語る。  
自分の頭で考え、未来に向けて責任ある行動ができる人になってほしい。安里先生の思いが生徒たちへと伝わり、彼らが行動する力となっている。

## ラオスの高校生と顔の見える交流を

世界に思いをはせることができる人になってほしい。大阪府立佐野高等学校の国際教養科ではインターネットなどを活用し、開発途上国との交流に積極的に取り組んでいる。



インターネットを通じたラオスとの交流。青年海外協力隊員と授業計画を練りながら進めている



貧困解決のための世界的キャンペーン「STAND UP TAKE ACTION」に参加



生徒たちの提案で文化祭でチャイを販売。一人一人がアイデアを持ち寄り、大きな力となっている